

## 初出荷のティラピア収入1万円

—ティバウ島の生態系を守る収入向上事業—

PPF、レイクセブ町と協働した「島の生態系を守る在来種の植林と持続可能な森林農業の推進」事業が完了しました。島の生態系回復には、開発企業の進出で土地を失い、焼き畑適地を求めて島にやってきた新住民を含めて、島民の代替収入源確保が、近道、かつ有効ということで実施した事業です。

町が指定する熱帯林保護区10haには、成木になるまでに10~30年かかる在来種6,250本と群竹150本を移植し、数年後の収入源になる果樹とコーヒー苗計1,900本は、受益者の山腹の畑計20haの等高線上に植えます。その樹間にコーン、根菜類を栽培し、日々の糧と当面の現金収入を得ます。

土地を持たない5世帯には、ティラピアの稚魚と飼料を支援しました。半年後の3月、初出荷のティラピアは丸木舟で町の公設市場に運ばれました。何かと出費が多い学年末の臨時収入約1万円に住民は大喜びで、一部は、次回養殖用の稚魚購入に充てました。

継続して2年目の事業も申請し、受理されました。申請には専門家の推薦状が必要で、1年目に続き、今年も環境カウンセラーの倉田氏の推薦をいただきました。現地は受益者の選定作業に入っています。さらに、今年、女性たちの副業として、ビーズ細工講習も支援します。COWHEDを通じて購入し、イベントで販売して代替収入の増加を応援します。(イオン環境公益財団助成)

## スララ町郊外、タラヒク村のゴムノキ事業

—20世帯10ha追加支援しました—

アラー川に向かって緩く傾斜するバランガイ・タラヒクの、ムスリムが多いマダル地区と、ティボリ民族のブラカン地区で、3年前に植えたゴムの木7,500本が、4~5mに成長し、一部は花や実をつけ始めました。樹液収入は4年後ですが、その前に種子の販売による収入も期待できます。



2年半で、バナナの2倍以上に伸びたゴムノキ。樹間のコーン、バナナは当面の収入源です。

この初年度受益者による組織MATUFAがよく機能していて、事業に参加しなかった住民も、研修で環境保全と収入向上の理念を共有している村です。苗木等の資材費とPPF指導者1名の人件費支援で十分成果を上げられると考えて、昨年度は自己資金(FY基金)で、20世帯10ha分の追加支援をしました。

先日届いた完了報告には、MATUFAの取り組みを評価したスララの町長の訪問を受けたこと、今後の町の協力を期待したいとの記述がありました。

## ボルールで多目的住民組織BSDS発足

—発起人は元カレッジ奨学生3人—

70号P1で鉱山会社を辞めて、妻の村に戻ったと報告をさせていただいた元奨学生夫妻ダンディとミエルナですが、山奥の生活は続けられず、夫の故郷ボルールに戻りました。そこで、国立MSUで農業専攻のボニファシオと出会い、3人で住民組織を設立、3月に政府機関に登録をすませました。条件が厳しい「Cooperative(組合)」ではなく、「Association(団体・グループ)」としての登録です。40名が500ペソずつ出資し、サリサリストアの運営、バナナや、ボルールの特産品バーベキュー用竹串の共同出荷を手掛ける多目的の住民組織です。

私たちが初等教育普及だけでなく、中等、高等教育も支援に含めたのは、村に2~3人でも専門教育を受けた若者が育てば、そのリーダーシップで、みんなで貧困や環境問題に取り組むようになってきたからです。しかし、限られた国家試験合格者を除いて、カレッジや専門学校を卒業しても定職に就けず、家族さえ十分支えられない奨学生がいるのが実情です。

ミエルナの場合は、やむなく鉱山会社の誘いに応じた結果、より大きな試練に遭遇することになりました。夫のダンディから、元スポンサーに支援要請の取り次ぎを依頼された時、同じ境遇の卒業生で、お金を申し合せてサリサリストアを始めるのはどうか。組織化すれば始業資金の支援は可能と助言しました。これが半年後のBSDS発足につながりました。この間、助言を求められることも多く、元COWHED組合長メルチさんに相談させていただきました。NGOスタッフとして多忙な中、ビラーンの卒業生の役に立つなら嬉しいとアドバイザー役を快諾いただきました。

今年の支援予算は約8万円の予定です。少ない始業資金ですが、大きく育ててほしいと思います。